

半側無視に対する肢節運動の効果と そのactivityへの応用

聖マリアンナ医科大学病院

能登真一 二木淑子
松本順子

〈はじめに〉 近年、半側無視（以下USN）に対するリハビリテーションアプローチの一つとして肢節運動の効果が注目されている。しかしそれらは殆どが左手使用のものであり、右手使用による効果は明確にされていない。今回我々は、手の動きを介さない視覚二等分課題を用いて脳血管障害によるUSN患者に対して右手の肢節運動の効果を調べ、その内の一例に対しactivityを導入しその効果を検討したので報告する。

〈対象〉 脳血管障害による右半球損傷USN（+）患者群12例、右半球損傷USN（-）患者群9例、左半球損傷患者群14例、健常者群16名を対象とした。USNの検出にはVisual Extinction、2点発見、線分二等分、Albert課題を用いた。全体の平均年齢は62.1±1.9歳であった。

〈方法〉 長さ1m、幅2cmのカラーテープを貼付した上に仮名を25個均等に配置した検査カードを作成した。そのカードを壁面に貼り、約30度の角度でカードを見上げるように被検者を壁から2m離れた位置に座らせた。「線分の両端を見て、そのちょうど真ん中だと思ふところの上に書いてある仮名は何ですか?」という指示により検査を施行した。中点の仮名を0として右へ偏位した仮名の数を右偏位値とし、左への偏位はマイナスとして表した。肢節運動は健側手（健常者は右手）を用いて机上で円を描かせた。肢節運動の有無で各8施行ずつを行い、両条件の右偏位値の合計の差により肢節運動の効果を比較した。統計手法はノンパラメトリック法を用いた。

〈結果〉 4群の結果を図1に示す。USN（+）群では、検査の右偏位値の合計が肢節運動無し条件で19.2±6.1となり、他の3群より有意に大きくなった。また肢節運動条件では右偏位値の合計が20.7±5.5となり、肢節運動無条件よりUSNが悪化する傾向を示した。しかし3例にUSNの改善を認めた。

〈症例〉 81歳、男性、右利き、脳血栓症。

H8年7月2日、左片麻痺にて発症。9月20日に当院転院となり、9月24日より作業療法開始となった。CT

にて右MCA領域の低吸収域を認めた。神経学的所見は、Br-stage上肢Ⅱ、左1/4 同名半盲、表在・深部感覚の重度鈍麻を認めた。高次脳機能障害ではUSN、Pacingの障害、Motor Impersistenceが認められHDS-Rは16/30点であった。また、夜間せん妄の状態に対しサイレースが処方されていた。先に述べた検査では肢節運動により右偏位値が37から22へと改善を示した。

activityとして肢節運動が非連続で回数の少ない“スティック手芸”と、肢節運動が連続で回数の多い“焼き板磨き”をそれぞれ2週間ずつ行った。毎日の治療の前で視覚抹消課題であるStar Cancellation課題を用いてUSNの評価を行った。その結果、“焼き板磨き”でUSNが軽減する傾向を示した（図2）。

〈考察〉 群研究の結果から、USN患者の中に右手の肢節運動によりUSNが悪化するあるいは改善する2つのタイプの存在が推察された。また今回の症例では、肢節運動が連続で回数の多いactivityがより有効である可能性が示唆された。Linは右手の肢節運動によるUSN改善の効果を報告しているが、今回の結果はそれに従うものと考えられた。今回の症例のようなタイプには高齢や前頭葉病変が影響していると考えられ、訓練に対する意欲が低く注意が持続しないなどのactivity選択に難渋するタイプであると考えられる。高次脳機能障害を有する症例に対するactivity選択の際の作業特性を考慮した方向性を示すことができたと考えられる。

〈まとめ〉 半側無視患者に肢節運動の効果を調べた。

①半側無視患者では右手の肢節運動により半側無視が悪化する傾向を示したが、3例に改善が認められた。

②肢節運動が連続で回数の多い“焼き板磨き”で半側無視が改善する傾向を示した。

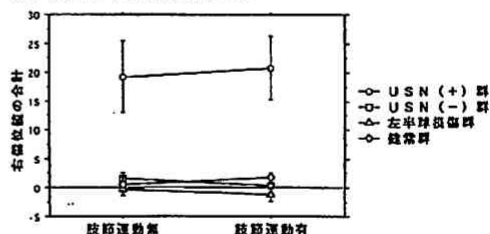


図1. 肢節運動と右偏位値の関係

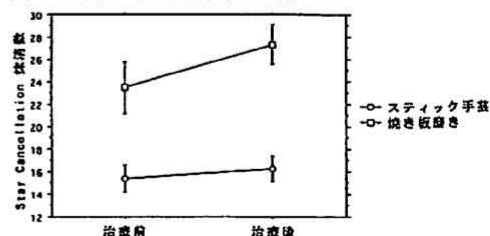


図2. activityとStar Cancellation 抹消数の関係